

詠風集

七月号



花鳥諷詠

7月号 (448号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和7年7月■第448号 ————— 目次

会長就任のご挨拶 井上 泰至 2

花鳥諷詠選集 山田 佳乃 4
高峰 武 6

この人の作品 吉岡 簫子 9

一頁の鑑賞 大橋 一弘10
池末 朱実11

総会報告12

虚子研究 『六百五十句』 研究 (65)15

第三回稲畑汀子賞選21

卯浪28

風報29

地区行事開催日程表31

編集後記32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

山田佳乃選

特選五句

寺町の風甘く染め仏生会

福岡吉田文代

春塵を拭へば廻るオルゴール

鹿児島松元靖子

あと少し尾鰭をつけて万愚節

室戸山本千秋

菠稜草一葉ひとはの火山灰洗ふ

鹿児島岡村るみ子

大爪の最後に入りて汐まねき

埼玉真篠みどり

二句短評

一句目——一画に寺院の集まっている寺町。仏生会が
あちらこちらで行われると花御堂の柔らかな花の香り
やほんのりとした甘茶の香りが漂ってくるという。

二句目——春塵がうつすらとかかるオルゴール。そつ
と拭えば止まっていたはずのオルゴールが鳴り始めた
のだ。螺子の巻き残しかもしれない。記憶がふと蘇る
ようなひととき。

入選六十句

一竿の帰心矢のごと鳥雲に

福山 広川 良子

掌に納まる仔猫貫ひ来し

小樽 伊藤 玉枝

み吉野の懷に泊つ鐘おぼろ

白山 大橋美代子

野遊や肩の荷一つづつほぐれ

佐賀 古庄たみ子

満開の花へ十歩の橋渡る

君津 榎本 静江

旋律を奏でし蝶の軌跡かな

神戸 涌羅 由美

闇平らはたと果てけり猫の恋

朝倉 鶴田 ゆき

田地蔵におにぎり預け麦を踏む

鹿児島 平山 洋子

湖面より波立つやうに鳥帰る

金沢 三島由紀子

野遊や躓きやすき母つれて

島原 三好 立夏

堀一つ越えて我が家の蝶となる

加賀 正藤 宗郎

靴紐をきりりと結び入社式

富山 武田 律子

落椿昨日の上に今日の色

福山 佐藤 浩子

幼子のおでこの返す春日かな

浜松 朝井 治代

藩邸の池へ殿様蛙鳴く

大牟田 石橋 武子

四つ手網ふるひ寄せつつ白魚汲む 東京 庄嶋 里子
 山々に物焼く煙廬出し 荒尾 大川内みのる
 お通路の経上ぐる声揃ひけり 阿南 谷川 宗和
 病窓の一と日夜桜朝桜 鎌倉 緒方 初美
 箒目の誘ふ静寂落椿 春日 永利五十鈴
 太き梁太き柱や蚕飼ふ 伊勢崎 飯塚 徳明
 傾きて瀬戸にりゆく鱈舟 高松 岡田 貞幹
 奥尻島の災禍の記憶鮎焼く 高崎 津久井洋子
 白じろと花冷のまたたそがるる 宝塚 二瓶美奈子
 春愁や小箱に仕舞ふ耳飾り 鹿児島 松尾千代子
 訪ふ人もなき山寺の僧長閑 長岡 安原 葉
 春愁のピアスつけたり外したり 熊本 木村佐恵子
 さくらさくら散るを忘れてゐる一日 伊賀 子日 康子
 妻の名を呼んでも駆けて来る子猫 高知 駒木 基克
 チケットの封のふくらみ花の旅 鹿児島 萩尾 葉月

仏塔に花冷の風突き当る 京都 山崎 貴子
 広がりにてまた塊りて蜩採 徳島 渡辺真理子
 俯ける観音像や花の雨 横浜 秋吉美佐子
 ふらここや高く高くと誘ふ雲 名古屋 中野ひろみ
 種を蒔く耳搔き棒に三粒づつ 山形 秋山 廣子
 法話待つ百畳敷のあたたかし 泉大津 山田 佳音
 春泥や天辺にある父の墓 宇都 鈴川 礼子
 順路には添はず春日に添うてゆく 高松 久本 照代
 厩出し阿蘇が生き生きして来る 熊本 南野 幸子
 腰掛けて風に身をおく花疲 諫早 榎本喜美代
 咲く桜散り敷く桜ある風情 西予 西川キヌエ
 幾重にも幾重にも空まで桜 東京 鹿谷 白月
 校庭でありしは昔桜散る 阿南 田中 栄子
 良く回る良く走る子の風車 広島 山根 正巳
 道ひとつ隔てておぼろなるさくら 羽生 塩田 章子

● 高峰 武選

特選五句

蔵中のへこみし飯盒昭和の日

舞鶴 早村 春鶴

ドラマーは女子高生や花万朶

高松 塩田 八寿子

蝌蚪生るる親族一同瓜二つ

金沢村 上秀 吾

繼ぐ者の絶えて最後の春田打

野々市 吉田 正則

病窓の一と日夜桜朝桜

鎌倉 緒方 初美

二句短評

一句目——蔵の中に飯盒がある。それがへこんでいる。飯盒も今では死語の一つかもしれないが、昭和の日という言葉が肅然とさせる。この飯盒はキャンペーンではなからう。捨ててはならないものがある。

二句目——選者も先日、似たような経験をした。女子高の中庭でスイングジャズを女子高生が演奏していた。窓から顔を出しては体を揺らす姿が爽やかだった。今どきは女子高生のドラマーは珍しくないのだから、花万朶が決まった。春である。

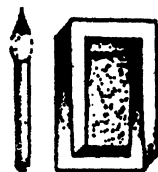
次々と夢の弾けてしやぼん玉	金沢 中村 直美
ウクライナ乙女の句集春寒し	熊本 今福 公明
春耕やひりひり肉刺のたなごころ	太宰府 野田 杉子
盛りすぎどこか翳りの八重桜	熊本 力 幸子
生真面目な嘘しかつけず四月馬鹿	指宿 難波真由美
永き日の椎の切株匂ひ立つ	富山 高城 玲子
長閑なり犬に乗船切符かな	松山 門田 安世
夕風に裏も表もなき落花	鹿児島 養輪ムツ子
夕明りして牡丹の匂ふ刻	神戸 田中あかね
子猫の眼きゆつと誰かを待つてをり	福岡 伊木田真理子
白壁に新旧並び燕の巢	伊賀 中島 庸子
花影にありて花人らしくなり	東京 関 千恵子
鳥の巢を覗き始まる朝かな	広島 前田 節
はな散る日囁き合うてゐるやうに	東京 白山 素風
天地を揺らす鳥城の雪柳	岡山 門田 和美

入選六十句

一礼を山へしてより耕せり	三鷹	中田 祐子	引き潮の音の遠のく実朝忌	福岡	沖永 洋美
瀬戸内のことに鱈の祭寿司	神戸	上岡あきら	落椿昨日の上に今日の色	福岡	佐藤 浩子
山彦の英語日本語山笑ふ	泉大津	多田羅紀子	幼子のおでこの返す春日かな	浜松	朝井 治代
消息を問はぬも想ひ日永かな	福岡	平山 順子	陶片に返す日差しや春の風	倉敷	田口ひさえ
押入れをこつそり開けて見る子猫	東京	荒井 桂子	水槽に飼はれてゐたり鯉五郎	福岡	小林 翠子
満開の花へ十歩の橋渡る	君津	榎本 静江	校舎より吹奏楽や春の風	鳥取	砂流 育子
行く春や一周一里の島巡り	太宰府	江里口幸生	阿蘇五岳一つ笑へば皆笑ふ	福岡	服部 朝子
おもむろに削る鉛筆蘆の角	札幌	齊藤 和加	大輪の汀子椿と言ふべかり	香川	三宅久美子
四捨五入すれば幸せ月朧	糸島	春田美智子	一輪と思へば二輪初花す	日立	鈴木 風花
田地蔵におにぎり預け麦を踏む	鹿児島	平山 洋子	鳶芽吹く解体決まる旧校舎	芦屋	長安 悦子
被災地の時刻みたり花時計	草津	田中 幸湖	田植機に十一代目孫の植う	阿南	鎌田 黄鳥
花万朶創業記念の夫は亡く	福岡	西村 榮子	芝桜一枚にして影持たず	生駒	山口 廣世
蛸壺の転びて四つ春の浜	鹿児島	松永 素子	春昼やキッチンカーのカレーの香	浜田	三沢 孝子
地に還る音を伝へて椿落つ	福岡	松山 牧子	末裔の一領具足鶏合	高知	森脇 杏花
野遊や躓きやすき母つれて	島原	三好 立夏	アダム・スミス蒼然として桜かな	宮崎	熊瀬川貴晶

雉子鳴くやまた新居建つニユータウン	高島 貫野 浩
靴下のかたつば残る春炬燵	守山 菅 邦子
春愁のピアスつきたり外したり	熊本 木村佐恵子
玄関にすみれ花壇と三輪車	高知 沢田 佳代
紫雲英摘み髪に乘せみる八十路過ぎ	稲敷 杉崎 淑子
刃物屋のどれも光りて春の市	出水 沖 弘子
亡き友より鳴りし電話や万愚節	帯広 吉岡 簫子
奥能登の名もなき流れ水草生ふ	石川 白根 寿子
春愁の既読にならぬだけのこと	福岡 山口 裕子
春の灯や一度も締めぬ帯展ぐ	高松 高橋 遥
蒼天を片手でくるり春日傘	福岡 森 順子
山桜咲いて棚田の目覚めけり	和歌山 市ノ瀬翔子
清明や僕予備校生となりました	堺 吉田 敦子
税申告終へ不揃ひの林檎買ふ	岩手 山口 國男
告げられし余命は忘れ花の旅	青森 七戸富美子

足跡の駅へとつづく雪の朝	西予 黒田 美穂
目も口も開けて目薬春埃	北本 鈴木 麻子
あゝこれが春空ほんと白っぽい	福津 有島 洋子
波しぶく岩に張りつく能登の海苔	石川 水橋眞智子
柴犬も美男美女ゐて花の下	尼崎 魚住富美子
地の底に水琴窟を聴けば春	立川 日置 正樹
小石にもふるさとありぬ啄木忌	神戸 石田 裕美
キャンパスの蘇鉄の孤独春の雨	横浜 守谷 一剣
耳うとき婆に道問ふ暖かさ	井原 坂本 一恵
長閑なり犬に乗船切符かな	松山 門田 安世
転職の馴染めぬ職場春の月	さいたま 太田 野風
二人しか座れぬベンチ花の下	松山 門田 智子
白壁に新旧並び燕の巢	伊賀 中島 庸子
のどかさやか厠の窓の牛の声	神戸 谷本 逸歩
村役目ありて朝寝の許されず	豊後高田 大波多美妃



編集後記

炎天に立ち出でて人またたきす 虚子

炎天に出たときの、くらくとする感覚は誰しも経験のあることだが、他人から見れば、立ち止まって瞬きをした動きと表情であり、自分の立場に立てば、世界が幻のように見えたことを想像すればいい。時間の急激な停止の感覚が、生命のゆらぎを呼び、世界の幻惑感を呼び覚ます。虚子のやろうとしていたことは、こうした意識の揺らぎすら俳句で表現しようとした、「挑戦」なのである。

●六月八日の総会では、事業・会計報告も可決され、新体制の人事が決まりました。内閣府の指導に従い、外務理事をお迎えし、協会のかじ取りを行うこととなります。私もその先頭に立つことになり、折に触れ改革の目的をお知らせしていくことにもなります。

●総会では、稲畑汀子賞・協会賞の授賞式が行われました。選考経過・選評は、本文をご覧ください。奇しくも、我々伝統派の目指す俳句とはいかなるものか、示すことができました。この機会によき作品を詠むべく励む心を新たにできましたなら、幸いです。

●オンライン講座では、珍しい虚子の無季句を、成田一子さんの提案で語っていたかどうかになりました。その線引きを知るのは、季題の本質と価値を逆に照らし出すことになるでしょう。協会の目的に照らして、無季の句の制作を推奨するものでは決していない

ことを、お断りしておきます。

●岡山での全国大会の募集句・当日参加は締め切っておりますが、投句された方で大会に参加されない方には、必ず入選句集を送らせて頂きます。

●先月号編集後記で、木村享史さんの逝去を一月と書きましたが、二月の誤りでした、記してお詫び申し上げます。

(井上泰至)

花鳥諷詠七月号(通巻第四四八号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む
年会費一〇、〇〇〇円

令和七年七月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二